

子どもは大人になりたいか

Do Children Want to Be Grown-Ups?

発達心理学教室 田丸敏高

Toshitaka Tamaru* : Do children want to be grown-ups? (Journal of the Faculty of Education, Tottori University, <Education Science> , 1989, 31-2)

はじめに

子どもにとって、大人は大切な存在である。これは、至極当り前のことのように聞こえるかも知れない。たしかに、子どもは大人に養育されなければ、育つこともできないし、生きていくことさえできないのだから。しかし、子どもにとっての大人の意味はそれだけではない。

子どもは、大人に保護され、育てられる。しかし、その際子どもは年齢の積み重ねだけで大人になるわけではない。子どもは、大人を目標に自ら成長し大人になるのである。というのも、人間である以上子どもも、目的に、自らの行動を選択しつつ生きているからであり、大人は子どもにとっての選択の目標であるからである。もちろん、子どもは、ふだんからある大人を具体的に選択の目標とし、生きているというわけではない。子どもの心のなかにある大人は、日常明確に意識されているというわけではないだろう。しかし、それでも、子どもは大人になることに対し、ある種の考えや気持ちを持っていることは十分考えられる。もっとも、子ども自身そうした自分の思いに気がつくのは、ある種の質問をされてはじめてのことであろうが。

ところで、子どもの目標となる大人は、直接自分を育ててくれている人とは限らない。それは、社会的存在としての大人である。子どもに将来どんな人になりたいかを問えば、さまざまな人や職業が表現される。なんらかの形で社会的役割を担っている大人が言い表される。子どもは、大人のなかに単独の人間を見ているのではなく、社会を見ているのである。このことは、たとえ子どもが「父親のような人になりたい」とか「母親のような人になりたい」というときでさえ、そう言える。そのとき、子どもは父や母だけを見ているのではなく、さまざまな人々と比較しながら、やはり社会を見ているのである。大人になるということは、社会を引き受けるということの意味するのである。

そのため、「将来どのような大人になりたいか」とか「将来何になりたいか」という問題と同時に、「早く大人になりたいか」という問題も成り立つのである。一定範囲の速さで年齢は否応なくたっ

*Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University

ていくので、子どものままでいることは生物的にはできない。しかし、心理的には、子どもは「大人になりたいか」「子どものままだいいか」迷いながら成長していると言えないこともない。子どもが大人になりたいかどうか考える際には、子ども自身がいまの社会をどう見ているかということが問題になる。そこには、現在の社会的状況が反映される。子どもは、大人のなかに社会を見、大人を1つの目標にしつつ、大人を理解し、批判し、そして、大人を乗り越えて成長し、新しい社会を築いていかざるを得ない。

目 的

本研究は、子どもが大人になりたいと思っているかどうか、またその理由は何かということ明らかにしようとするものである。そのためには、当面2つの観点が必要である。1つは、それを社会認識の問題として捉えること、もう1つは、それを発達の捉えることである。

子どもが大人になりたいかどうか考える際、子どもは「大人」を単独に表象すればいいわけではない。そこで問題になっているのは、社会人としての大人、すなわち、ある社会的関係の担い手としての大人なのであるから。子どもは、大人になりたいかどうかを問われて、大人の社会について、おそらく、とりわけ大人が従事している労働について考えざるを得ないだろう。それは、子どもにとって1つの社会認識の問題なのである。そこには、現在の子どもと社会の関係がなんらかの形で表現されることになる。

子どもは、大人になりたいかどうか考えてある結論を出す。その理由付けでは、いっそう思考が要求される。なりたいかどうかの結論は同じでも、それに至る思考は同じとは限らない。そこには、子どもの発達的特徴が示されるであろう。われわれは、この間子どもとの対話を通じて、子どもが社会をどのように理解しているかについて調べてきた。すると、子どもは、社会認識において独特の困難に突き当たることがわかった。小学校低学年までの子どもは、店で買物するとき、お金を払うことは知っていてもそのお金がどうなるかは皆目見当がつかない。おつりの場合以外には思い当たらないのである。これは、社会認識上の場面的拘束とも呼べるものである⁽¹⁾。また、子どもは、「お金をいっぱい造れば、みんながお金持ちになるはずだ。」と考える。「そうしないのは、きつとしまって置く場所がないからだろう。」これは、社会的関係と個人的関係とを区別する困難を表わしている⁽²⁾。また、自然認識と比較した場合の社会認識の困難もある。なぜ、スイカはバナナより値段が高いのか。大きいからか、おいしいからか。子どもは一生懸命スイカとバナナとを比べるがなかなかいい答えが見つからない。子どもは、もののなかに自然的性質は発見できても、社会的性質は発見できない⁽³⁾。このように、子どもは、社会について認識しようとするいろいろな困難に遭遇するのである。そして、これらの困難を子どもそれぞれの年齢特有の形態で「解決」する。大人になりたいかどうか考える際にも、こうした発達の特徴は十分問題になろう。

以上の観点に基づき、本研究では、子どもに「早く大人になりたいか」という質問をし、子どもが大人になることを期待しているかどうかを明らかにするとともに、そのときの子どもの理由付けの仕方を分析することにより、子どもが大人について考える際の思考過程の特徴点を示してみたい。

方 法

子どもの考え方の特徴は、質問に対する最終的な回答結果と同時に、それに至る思考過程によく

示される。したがって、認識発達研究においては、思考過程を現わす対話法に大きな利点がある。質問紙調査法は、資料を大量に集めることができるという特徴があるが、多くの場合回答の選択肢があらかじめ限定されるので、それを選ぶ際の子どもの思考過程は不明のままになる。そうした理由で本研究では、対話法を採用するが、考察においては、これまで行なわれてきた質問紙調査法による同様な研究も比較検討したい。

対象児 米子市A小学校100名 (男53名, 女47名)
 うち 2年生 31名 (男15名, 女16名)
 4年生 38名 (男22名, 女16名)
 6年生 31名 (男16名, 女15名)

日時 1987年12月

場所 A小学校教室

手続き 子どもと1対1で向い合い、子どもの社会認識にかかわる一連の事柄について質問する(質問項目数23)。その際、回答結果よりも、子どもの考え方、思考過程を取り出そうと努力する。インタビュー時間は1人あたり20分から30分程度である。対話の様子は、カセットテープレコーダーに録音し、それを起こしたものを1次資料とした。今回取り上げる質問項目は、「あなたは、早く大人になりたいですか」というものである。

結果と考察

A. 「早く大人になりたいか」に対する回答

はじめに、質問「早く大人になりたいか」に対する子どもの回答を、学年別に整理する。表1は、その結果を示したものである。

「早く大人になりたい」と答えた子どもは、2年生13人(42パーセント)、4年生11人(29パーセント)、6年生8人(26パーセント)であった。また、答え方に男女差はあまり見られず、学年差が大きい。2年生では4割を越えていたのに、4年生では約3割になり、6年生では約4分の1となる。学年を追うごとにだんだん「大人になりたい」子どもの割合が減少する。

表1. 「早く大人になりたいか」に対する学年別回答結果

学年	はい	いいえ	その他	計
2年	13 (6, 7) 42	14 (7, 7) 45	4 (2, 2) 13	31 (15, 16)
4年	11 (6, 5) 29	25 (16, 9) 66	2 (0, 2) 5	38 (22, 16)
6年	8 (3, 5) 26	22 (12, 10) 71	1 (1, 0) 3	31 (16, 15)

人数 (男, 女)
割合 (パーセント)

では、なぜ大人になりたい子どもがあまり多くないのか。そもそも、子どもは大人なんかになりたがらないものなのか。また、学年を追うごとに「なりたい」子どもが減るのはなぜだろうか。

ここでは、問題を提出するにとどめ、子どもの理由付けの分析に移ろう。

B. 理由付けの分析

本研究では、子どもに「早く大人になりたいか」尋ねた後、その理由も求めた。そこで、自発的に理由を述べた子どもを対象に、理由付けの分類を行なってみる。子どもが述べた理由のテーマを分類したのが、表2である。「仕事」というのは、ある仕事がしたいから早く大人になりたいとか、仕事がたいへんだから大人になりたくないといった理由付けを指している。「お金」は、お金がもらえるから大人になりたいといった理由付けである。「遊び」は、大人になると遊べないからなりたくないというもので、「学校・勉強」は、学校や勉強を理由に大人になりたいかどうか判断したものである。「成長・老化」は、加齢をテーマにしたもので、死ぬから大人になりたくないとか、能力を増すので大人になりたいとかいうものである。「自由」は文字どおり大人になりたいかどうかを大人の自由さと結びつけて考えたものを指す。「人間関係」は、友達や親との別離までを理由に大人になりたくないと考えるものなどを指す。「その他」は、以上に入らないもの、たとえば、自分の将来の夢との関係を言ったものなどがある。理由付けは、各人1種類とは限らない。

表2. 理由付けの分類

学 年	理由を述べた子ども	仕事	お金	遊び	学校勉強	成長老化	自由	人間関係	その他
2年生	28人	15	2	3	1	4	2	2	4
4年生	34	17	7	4	5	7	4	3	4
6年生	28	18	3	6	1	1	4	0	5

注 1人で複数の理由付け有り

「早く大人になりたいか」に対する回答の理由付けのなかで、まず、仕事について言及しているものが多いことがわかる。その割合は、理由を述べた子どものうち、2年生では54パーセント、4年生では50パーセント、6年生では64パーセントである。そのほかの理由付けとして、仕事に関連が深いお金に、あるいは、遊び、学校や勉強、加齢（成長と老化・死）、自由、人間関係（友達や親）に言及しているものが見られる。

理由付けの中心テーマが仕事であるようであるが、仕事について言及した子どものうち、「早く大人になりたい」という子どもと答えた子どもと「なりたくない」と答えた子どもとを分類すると、表3のようになる。

仕事について言及した子どものうち、「早く大人になりたい」という子どもは、2年生では8人(53パーセント)であるが、4年生は5人(29パーセント)、6年生は5人(28パーセント)と少ない。

表3. 仕事について言及した子ども

学 年	言及した総数	なりたい	なりたくない
2年生	15人	8	7
4年生	17	5	12
6年生	18	5	13

また、「なりたい」という子どもの仕事の取り上げ方には、重要な特徴がある。それは、まず、仕事を具体的に考えているという特徴である。2年生では8人中6人が、4年生では5人中3人が、仕事を具体的に述べている。

大人の労働

大人と子どもとの明らかな相違点は、大人は労働することによって社会的役割を果たしているということである。子どもは、大人について考えるとき、まず労働を思い浮かべる。子どもにとって、「大人」は「労働」

と対を為している。本研究においても、「早く大人になりたいか」と問われて、その答えの理由付けで「労働」について自発的に言及した子どもの数は多い。

以下、「早く大人になりたいか」と聞かれたときの子どもの答えを、対話のままの形でとり上げ検討してみよう。

小2 (女) 「はい。」——どうして早くなりたいですか?——「いろんなお仕事したいから。」——じゃあね、どんなお仕事したいのかな?——「お菓子屋さんとかね、果物屋さんとか。」——じゃ、どうしてお仕事したいのかな?——「おもしろそうだから。」

小2 (女) 「(うなづく)。」「それは、どうして?——「なりたい仕事とかある。」——うん。どんな仕事なりたい?——「歯医者さん。」

小2 (男) 「(うなづく)。」「どうして?——「ぼく、大きくなったらね、設計したりする人になりたい。」

小2 (男) 「はい。」——なぜですか?——「大人になって、絵描きになりたい。」

女4 (女) 「なりたい。」——どうして?——「あのね、私も働いてみたいから。」——そう。どんなことしてみたいの?——「看護婦さんになりたい。」

女4 (女) 「なりたい。」——どうして?——「お店屋さんとかがしたい。」——早く働きたい?——「うん。」

最初、子どもにとって労働は、具体的な姿で、すなわち、仕事として思い浮かべられる。こうした子どもたちは、早く大人になることを肯定する。

労働経験の乏しさと労働の抽象化

労働は必ずしもその具体的な姿で思い浮かべられるとは限らない。むしろ、多くの場合は、目的の行為全体として具体的に表象されるのではなく、ある面だけが、たとえば苦勞の面だけが、とり

出されて抽象的に表象される。そのとき、労働は否定的なものとなり、大人になることも否定されやすい。子どもは、事象を全体的にとらえることが困難である。労働が抽象的な形態で表象されれば、具体的な形態は見失われる。「対の思考」は、事象の両側面を比較・勘案することを許さない。

小2 (男) 「なりたくない。」——どうして?——「大人になると働かんといけんけん (働かないといけないから)。」——どうして働きたくない?——「だって、大変だしね、頭使わんといけんし、重たいものを持たないといけんし。」

小2 (女) 「... なりたくない。」——どうして?——「... 大人になるとえらいから。」——えらい?何がえらい?——「仕事したりするのが。」

小4 (男) 「いいえ、あんまり早く大人になりたくありません。」——じゃあね、働きたいですか?——「働きたくありません。」——それはどうして?——「働くと疲れたりして、もう厭になったりするからやりたくないと思います。」——ほかにないかな?——「それとか、会社で、お金が少しになったり、多くなったり、そういう風になったりするから、いやです。」

小4 (女) 「そんなに思いません。」——どうして思わん (思わないか)?——「大人になったら、なんか頭を使って仕事とかもしないといけないし、それとかお金のこともちゃんと計算してやらないといけないから。」——じゃ、働きたいと思う?——「別に働きたいとは思いません。」——どうして?——「働いたりすると疲れるし...」

小4 (男) 「そうでもない。」——どうして?——「んー、なんとなく、大人になったらたくさん働いて大変だから。」

小4 (男) 「あんまり。」——なりたくない?——「大人になったら、働いてすごくえらい (疲れる)。」——あー、しんどいけなあ。働きたくない、あんまり?——「... 1回なんかやってみたい、どれくらいえらいか。」

本児は、最後に1回働いてみたいという。本児は、実際労働がたいへんかどうかは知らない。おそらく、親から聞いているだけであろう。したがって、たいへんそうだなあと思う一方で、働いてみたいとも思っている。

部分化された労働

労働の抽象化は、年齢が上がるほど進む。高学年になれば、親から見聞きしたことやテレビや新聞等を通じて、労働のさまざまな側面が、とりわけ、部分化された、あるいは疎外された労働の側面が、表象される。労働が、その本来の姿で、目的的行為として表象されないとき、労働は、子どもにとって好ましくない活動になる。

小6 (女) 「いや、なりたくは... ないですね。」——どうしてそう思うのかな?——「えっと、なんていうのかな、仕事したりなんか、なんか、お茶くみとか、なんか、そういうのになってしま

ったり,... あの仕事していたら、それとかあとなんか、会社がつぶれることはないかも知れないけれど、つぶれたりすることもあったり... (笑)。」

小6 (女) 「なりたくない。」——なんで?——「いろいろ子どもの世話とかしなきゃいけないから...、働かなくてはいけないし、水道代とかいろいろやらなきゃいけないから。」——働きたくないですか?——「働きたくないってことはないけど...体が持たなくなってしまうかもわからない...。」

労働とお金との結合

「大人」が「労働」と結びつき、その労働が抽象的に把握されたり、あるいは労働そのものではなく労働の結果だけが表象されても、それが「お金」と結びつくことがある。子どももお金に対する欲求は強い。すると、「大人」は再び肯定的に評価される。

小2 (女) 「(うなづく)。」——どうして、——「えっとね、働くとお金がもらうから。」

小4 (男) 「はい。」——なんで早く大人になりたい?——「早く働きたいから。」——なんで?——「働いたら、お金を、お給料をもらって、お父さんお母さんに分けてあげる。」

小6 (男) 「はい。」——それは、どうしてですか?——「仕事とかできるから。」——じゃあ、仕事とかしたいの?——「仕事とかしてお金をもらいたい。そして、大きな家を建てたりできるから。」

小6 (女) 「はい。」——それは、どうしてですか?——「えっと、あの仕事とかできるから。」——どうして仕事とかしたいんですか?——「えっと、お母さんとかお父さんとか、仕事をしてやってきて、お金を稼いで食費とか出してくれるっていうか、だから、その出してもらった分ぐらい返してあげる。」

小6 (女) 「はい。」——どうして?——「大人になって、いろいろ一生懸命働いて、お金を貯めていろんなものを買いたい。」

お金による判断基準の形成

お金は、社会的交換の物質的尺度である。お金は、労働を表現し、社会的労働の結果としての生産物の価値を表わしている。疲労や苦労も労働の結果であるとすれば、お金も労働の結果である。中・高学年では、お金は労働のある側面(たとえば、仕事の苦労)と比べられる。その比較を通して、大人になりたいか・なりたくないかの理由付けが行われる。ものごとの2つの側面の考慮が始まる。

小4 (男) 「なりたくない。子どものままがいい。大人になったら、お金もらっていろいろ買えるけど、大人になってほしいものを買っても、子どもの方がおもしろい。ファミコン、大人になって買ってもおもしろ味ないし、興味なくなるし、大人は仕事熱心になってしまうし...。」——働きたくないの?——「うん、あんまり。」

小4（女） 「えっと、大人は、なんか、働いてお金をもらえるけど、なんか、すごく働くのが大変だから、子どもの方がいいと思う。」

小6（男） 「まだもう少し子どもでいたいです。」——なんで？——「よくお父さんやお母さんの仕事は見に行くけど、そういうのを見てちょっとたいへんだなと思います。」——じゃあ、早く働きたいですか？——「はい、そういうのはあります。」——なんで早く働きたい？——「いまおばあさんがいるんだけど、そういう人にも楽をさせてあげたいからです。」

大人：子ども＝労働：あそび

「大人」は「子ども」と対になっている。「子ども」は「遊び」と対になっている。「大人」は「労働」と対になっている。そのため、「遊び」と「労働」とは対比されることになり、「労働」は「遊び」とは異なり、楽しくないものとして異い浮かべられる。そうすると、「労働」の楽しい側面は、排除される。また、「大人」から「遊び」は排除される。

小2（男） 「なりたくない。」——どうしてなりたくない？——「おもしろいから。」——何が？——「遊ぶの。」——そうか、遊んでいたい。じゃあね、〇くんは働いてみたい？——「（首を振る）」——どうして働いてみたくない？——「つまらない。」

本児は、どうして大人になりたくないのか理由を尋ねられて、「おもしろいから」と答えている。ここには、省略がみられる。「大人」は「子ども」と対を為し、「子ども」は「遊び」と対を為している。「子ども」という対を介して、本児は、「大人」からいきなり「遊び」を思い浮かべる。そして、「おもしろいから」という答えに至る。対による思考の特徴がよく表われている。

小4（男） 「なりたくない。子どものままだいい。大人になったら、お金もらっていろいろ買えるけど、大人になってほしいもの買っても、子どもの方がおもしろい。ファミコン、大人になって買ってもおもしろ味ないし、興味なくなるし、大人は仕事熱心になってしまうし...。」——働きたくないの？——「うん、あんまり。」

小4（女） 「思わない。」——どうして？——「子どものほうがなんかまだ遊べるし、大人になったら、あのなんか仕事しないといけないから。」

小6（女） 「いいえ。」——なんで？——「大人になるといろいろ仕事があって、なかなか遊べなくなるから。」——早く働きたいですか？——「まだ働きたくないです。」——なんで？——「まだいろいろなことがしたいから。」

大人：子ども＝労働：勉強

「労働」は「勉強（学校）」とも対比される。

小2（男） 「うん。」——なんで？——「... だって、ちっちゃいときは、学校へ行かないといけ

ないでしょ。大人になったら、あんまり行かんでいいから。」

学校にいかなくて済むだけが大人ではない。大人は、その分もっといろいろなことをしなくてはならない。しかし、いったん「学校」が問題になると他のことは考慮の範囲から脱落する。これも対の思考の特徴である。

小4 (女) 「なりたくありません。」——どうして?——「大人になると、なんかね、働かなきゃいけなくなるし、いろんなこともしなくちゃならないし、年をとるから、いや。」——働くの嫌い?——「あまり好きじゃない。」——どうして?——「朝早く起きて、ほとんど休み、学校みたいに休憩ほとんどないし、だから。」——休憩ないってどうして知ってるの?——「お母さんが言う。」

小4 (男) 「いや。」——どうして?——「年をとりたくない。働いたり、あの、子どもとただ勉強したり遊んだりしてるだけだから。」——じゃ、働きたいと思う?——「うん。」——それはどうしてだ、大人になりたくないけど?——「ずっと僕ら1年生の頃から言ってたんだけど、働いてお金儲けして、お母さんたちをどっかに連れて行ったり、あの、いろいろなことをしてあげられるから。」

小6 (男) 「いいえ。」——どうして大人になりたくないの?——「働きたくない。」——どうして働きたくないの?——「勉強していた方が気が楽だから。」——お父さん見ていると... たいへんそうか?——「たいへんだと思います。」

本児は、勉強の方が楽だと考える。しかし、次の子どもは、「勉強」と比べることを強要されて「働くほうがいい」と考えを改める。

小6 (男) 「いいえ。」——どうして?——「大人になると、子どものときよりかずっと働いて、働くのが働いて、働くのがえらい。」——勉強しとった方が楽なの?——「うん。」——じゃあ働きたいですか?——「はい。」

加齢、すなわち、成長と老化(死)

「加齢(成長と老化)」も「大人」と結びついたテーマである。加齢が成長(能力の拡大を含む)と結びついたとき、大人になることは肯定されるが、老化や死と結びついたとき、大人は否定される。低学年では、一方は他方を排除する。

小2 (男) 「ううん、なりたくない。」——どうして?——「あのね、大人になったら早く年をとって死んじゃうけん(死んでしまうから)、子どものままで遊んどりたい。」

小2 (男) 「なりたくない。」——どうして?——「それはね、早く年をとってね、おじいさんみたいに変なふうになる。」

小2 (男) 「早く大人になってお金をもうけたい。」——早く大人になりたい?——「(うなづく)」

——・・・——それはどうして？——「えっとね、早く大人になったら、お金は何円持ってもいいし、えっと、それだし、2年生よりか強くなれるし、ぼくは魚が大嫌いだから、大きくなってからはちゃんと食べて暮らしていきたい。」

小2（男） 「はい。」——どうしてかな？——「働いたりするなら、体力がついたり、それ、大山登山にいったり行ってみたいからです。」

小4（男） 「早く大人になりたいです。」——どうして、早く大人になりたいですか？——「子どもの頃だとなんか気楽すぎて、なんかゆったりするようなことがあるけど、大人になると、しゃかしゃかしゃきつ、ちゃんとしていかないといけないから、ぼくはそんな風に早くなりたような気がするので、ぼくは、早く大人になりたいです。」

小4（男） 「えっとね、まだ大人になったら、うんとどうせ、大人になってどんどんどんどん育っていくって、それでいろんな友達とかも働くためにどこかへ行ってしまうから、今の子どものままのほうがいい。」——ほかの理由がある、子どものまんまがいいって言う？——「大人になったら、したら、えっと、死んでしまうから。えっと、なんか死ぬより子どものまんま幸せに暮らしたい。」

小4（女） 「なりたくない。」——なんで？——「早く死ぬから。」

小4（男） 「僕は、そんなに早く大人になりたくありません。」——それは、どうしてですか？——「えーと、大人になると死ぬ、なんか、年をとったりするのが僕はいやで...。」

大人と自由

大人になることは自由になることを意味する。

小2（女）

「ううん。」——なりたくない？——「うん。」——どうして？——「子どもの方がいい。」——何で？——「わからん。」——理由はない？——「理由はないけど、何だか働かないといけんでしょう。」——で、働きたくないということか、簡単に言うとか？——「そういいわけじゃないけどな、なんか、大人にあんまりたりたくないね。」——働くだけじゃないか、理由は？——「んー、それだけじゃない。なんかねー、めんどくさいっていうか。」——何が？——「なんか、いろいろ、なんつーかね、頭かたくなっていくでしょ、いろいろ、んー、もうちょっと、どげでもえー。なってもいいけど、まあ、ええわ、なろう。」——早くなりたかどうかを聞いたんだよ。——「早くなりたか。なりたい。」——なんで？——さっきはなりたくないって。——「なりたい。いや、もう何でもいいや。早く大人になりたいと。」——なんでだいや？——「大人になったら、遅くまでテレビ見れるし、うん、別に怒る人もおらなくなるし、自由になれるわけだ。」

小4（男） 「はい。」——なんで早く大人になりたい？——「自由になりたい。」

小6（男） 「えー、早く？あー、わからん。」——どっちかな？なりたくない、なりたい？——「じ

「じゃあね、えっと、じゃ、なりたい。」——どうしてなりたいのかな？——「まー、どっちでもいいけど、えー。」——大人になりたいとしたらどうしてかな？——「えっと、自由なことができるから。」——ほかに？——「ない。」——じゃあね、Nくんは働きたいですか？——「働きたいってことはないけど、働かないといけんとちゃう。」——働きたくはないんですか？——「そりゃまあ、働かんでお金もらえるんだっいたらいい。だけ、働く。」——どうして働かんほんがいい？——「そりゃ楽だけん。楽ができる。」

小6 (男) 「はい、なりたいです。」——どうして？——「えっと、あの、お酒が飲めるし、あとは、自分でいろいろ好きなことができるし、親から離れてあと働いてみたいし、そういうことで早く大人になりたいです。」

C. 子どもは大人になりたいか

この問題について考えるとき、2つのことを考慮しなくてはならない。1つは、子どもの発達であり、もう1つは、社会的状況である。前者について言えば、子ども（主として、9才以前の子ども）は、物事を全体的に把握し、理論的に判断することにはまだ手が届かない。そのかわりに、子どもは「対」を用いて思考する⁽⁴⁾。子どもは、大人について考えるとき、それ自体単独で考えるということはない。子どもにおいて、「大人」は何かと対を為している。その対を為すものに影響されて、大人になることは、肯定的にも否定的にも判断される。まず、「大人」は「労働」と対を為す。ただし、その労働がどのようなものとして表象されるかによって、大人になることに対する考え方も変わってくる。低学年では、労働は具体的で、目的的な営みである仕事として表象される。これは、主として経験によるものである。子どもは、仕事に興味を持っている。子どもは、仕事を身近に経験することによって、それに惹かれて、「大人に早くなりたい」と思う。次に、労働は抽象化される。そのとき、労働は“labour” [苦役]として子どもに浮かぶ。これは、直接経験というよりは、親の様子を見たり親から聞いたりしたことが大きいようである。伝聞によって、部分化された、疎外された労働も考える。そのとき、そうした労働と結びついて、大人になることも否定される。低学年では、労働の具体的側面と抽象的側面とを同時に把握したり、交互に比較したりすることは困難である。一方を表象すれば、他方は思考の過程に入ってこない。

現代社会では、労働は賃労働という形態をとっている。「労働」は「お金」と対を為す。お金に対する欲求を持つ子どもは、「労働」を「お金」と結びつけるときは、大人になることも肯定する。中・高学年では、労働の結果であるお金と労働の苦役的側面との比較が行なわれる。そして、大人になることの損得を考える。

「大人」と「労働」とが結びつくとき、「子ども」と「遊び」とが結びつくことがある。「労働」が「遊び」と対比されるため、「大人」から「遊び」が排除される。大人はもう遊ぶことができないと子どもは考える。勉強や学校も同様な関係にある。大人は勉強しなくてもよいと考えられる。

「加齢」ということも「大人」と対を為す。加齢も2つの側面を持つ。一方では、成長・発達があり、他方では、老化・死がある。低学年では、成長と老化とを同時に考えることは難しい。一方を思い浮かべると、他方は消える。そのどちらかが思い浮かぶかによって、大人になることは肯定されることもあり、否定されることもある。

最後に、「大人」は「自由」と対を為す。このとき、子どもは「早く大人になりたい」と思う。

さて、もう1つの子どもを取り巻く社会的状況の問題を考えてみよう。先に示したように、「大人になりたい」子どもは、学年とともに減少したし、また全体としても少数であった。子どもは、そもそも大人なんかにはなりたくないものなのだろうか。1979年に、NHKは全国の小学6年生と中学2年生と各900人を対象に質問紙調査を行なっている。そのなかに、「あなたは早く大人になりたいと思いますか。それともそうは思いませんか」という質問項目がある。「そう思う」と答えた人は、小6で22%、中2で20%だった⁽⁵⁾。「そうは思わない」と答えた人は、小6で74パーセント、中2で76パーセントであった。また、1984年の調査では、小学校4～6年生で、「そう思う」と答えた人は、29パーセント、「そうは思わない」と答えた人は68パーセントとなっている⁽⁶⁾。いづれにしても、6年生を見る限り、対話法による本研究と似かよった結果と言える。しかし、旭通信社が1979年にアメリカで行なった調査では、「早く大人になりたい」子どもが52%であったという⁽⁷⁾。つまり、「大人になりたい」という者が少数であるという傾向は、日本的なものではあっても世界共通なものとは言えないようである。ここには日本的な事情が反映していそうである。

その日本的な事情については、「労働」が子どもたちの前にどのように示されているかに関わりがありそうである。日本の場合、近年の急激な産業構造の変化にともない、物質的財貨の生産に携わる人口が激減し、一般に労働の具体的な姿が見えにくくなっている。そのことは子どもの意識にもなんらかの影響を与えざるを得ない。労働が仕事としてその全体的な姿において現われなければ、苦役だけが残る。働くことの楽しみは、労働の結果の1つであるお金に求めざるを得ない。そうなれば、大人になることはそうよいことではなさそうだとということになる。また、日本では、大人が堂々と遊ばない、あるいは遊べないというのも、大人になることをおもしろくなさそうにさせている要因かも知れない。大人の遊びが、会社の付き合いか家族（子ども）サービスでしかないのならば、遊びは無いに等しい。これは、「労働」と「遊び」とを対立させたままにさせておくような対の思考にとって都合のよい状況である。老化がどの程度好ましくないものかは、社会的状況によって左右される。大人の自由さについても当然社会的状況によって現右される。詳細については今回の研究からは推測の域をでないが、「早く大人になりたいですか」に対する子どもの回答には、日本の大人社会の現実的状態が反映していることは否めないだろう。

注

- (1) 場面に拘束された思考については、次の論文参照。
田丸敏高 1987 対話事例にみる児童の社会認識の発達 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)29-1 55-71ページ
- (2) 社会的関係と個人的関係との区別の困難性については、次の論文参照。
田丸敏高 1988 子どもはどのようにして社会を認識し始めるか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)30-1 203-229ページ
- (3) 自然的関係と社会的関係との区別の問題については、次の論文参照。
田丸敏高 1989 児童の価格と利子の理解にみる社会認識の発達 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)31-1 213-224ページ
- (4) 「対」による思考については、ワロンが自然物を話題にした子どもとの対話において、詳細に検討している。
Wallon, H, 1945, Les origines de la pensée chez l'enfant, 1945 滝沢武久・岸田秀(訳) 子どもの思考の起源(上) 明治図書 1968 80-204ページ
- (5) 1979年にNHKが行なった「小学生と中学生の生活と意識」に関する調査については、次の文献参照。
NHK放送世論調査所編 日本の子どもたち 日本放送出版協会 1980 89-93ページ

- (6) 1984年にNHKが行なった「小学生の生活と意識」に関する調査は、次の文献から引用した。
総務庁青少年対策本部 青少年白書 昭和61年版 大蔵省印刷局 1986 34ページ
- (7) 文献(5)89ページによる。

